

平成 29 年 1 月 12 日 応接室にて

鈴木和夫白河市長

ポイント

- ◎まちづくりの中で文化財行政を進めることで、思いが描く歴史まちづくりに踏み出せました。
- ◎蔵は個人の持ち物ですが、町並み全体は白河の歴史的な資源ですから、なんとしても守っていかなくてはならない。
- ◎自分の街に対する「危機バネ」が働くと動き出すが、最初からこれをつくれと言うと長続きしません。
- ◎他の都市でいいことやっているのはためらわず取り入れます。
- ◎社会の中で活躍している人が活動の中心にいないと、他人ごとになってしまい、まちづくりは成功しません。
- ◎市長はオーケストラの指揮者のようなもの。それぞれのベクトルで動いている団体の奏でる音色を調和させるのが役割です。

聞き手) 平成 20 年に歴史まちづくり法ができて、今年が 8 年目です。この間 60 近くの市町村で取り組みが進められ、地方自治体にとって魅力あるプロジェクトとなっているように見受けられます。私から見て、これらの取り組みには、二つの特徴を感じています。一点は他の都市計画のプロジェクトに比べて、市長のトップダウンの傾向が強いことです。どのまちでも取り組みの前面に市町村長が出てきていますし、歴史まちづくりサミットもその現れの一つです。もう一点はその逆で、地域の人々の参加が積極的になされていることです。これには法律の仕組みとして、歴史的風致維持向上計画を策定する際に地域の人々の活動を組み入れていくことが必須で、行政だけではできない仕組みになっていることも背景にあると思います。実際に計画策定の協議会などで伝統産業に従事されている方などと意見交換をしながらプランを練っています。トップダウンの強いリーダーシップの下で、地域の積極的な参加によって進められているというのが、歴史まちづくり計画の特色ではないかと思っています。

そこで、トップダウンの責任者である市長がどのような思いで取り組みを始められたかなどについて、直接そのお考えをお伺いし、その結果を全国の自治体にお伝えしたいと考えました。市長の思いを聞かせていただきたいと思っています。

1. 歴まちに取り組んだ動機

聞き手) もともと白河市では、いろいろな文化財の施策に取り組まれていましたが、歴まち法ができて早い段階で着手されました。市長の思いを聞かせてください。

市長) 東北歴史まちづくりサミットのときにも披露した話ですが、私は白河市出身で、市長に就任する以前は、福島県の職員として県の行政に取り組んでいました。そこで、様々な市町村のまちづくりを支援していたわけですが、その当時、県内には 90 市町村あり、特に平成のバブルがはじけて以降の、各市町村の様々な取り組みの中で、自分の個性を生かしたまちづくりを進めていこうという機運が高まっていた時期でした。例えば会津若松市、白河市、相馬市などは歴史的な文化財が沢山あり、それを活かしたまちづくりというのが、これからの地域づくりには必要だと強く感じたわけです。抽象的に言えば、外部の力を借りてくる、国の補助金、交付税で財政支援をお願いするというのが



鈴木和夫白河市長

それまでの地方行政のメインでしたが、やはり地元にあるものを活かしつつまちづくりを展開していく、大きな時代の転換点を迎えているような気がしました。図らずも市長になった時に、そのことが念頭にありました。ですから、産業振興のために地元中小企業の専門的支援機関をつくったり、中心市街地活性化基本計画の認定を受けて地域資源を活かしたまちづくりを進めることに着手しました。足元の資源を活かしたまちづくりに取り組むため、どのようなアプローチができるか模索していた時期でしたので、歴まち法という法律があるということを知り、非常にいい法律だなと思い、関心を持ちました。三省庁の連携の下に、国交省と文化庁が手を携えて、文化的なものを含んでソフトとハードの両方に支援をしていくというのは、タイムリーな政策だと思いました。大変評価をしております。白河は歴まちの法律の趣旨にかなう歴史的資源を持つまちであると思っておりましたので、職員に指示し、国土交通省に連絡を取り、いろいろな助言をいただき、歴まち計画の策定を進めました。小峰城や南湖公園、白河の関跡や旧奥州街道など、多くの歴史的資源が残っていますが、それを具体的な政策として、活かしてきたのだろうか、あるいは活かそうと努力してきたのかと考えると、少し力不足のところはあったことは否めないわけですし、歴まち計画の認定をきっかけとしてまちづくりの有力な武器として使えるだろうと考えました。その前に、景観法という法律が平成 16 年にできましたが、かつて県の都市計画課の職員として景観の仕事を担当し、熊本県で細川知事の時代、平成 6 年に全国の景観のシンポジウムがあって参加したこともあり、まちづくりにおける景観の大切さに関心を持っていました。景観法で景観行政団体となる市町村が景観政策の主体となることになり、景観のまちづくり、そして歴史のまちづくりと何かずーっと繋がってきたような、一連の流れの中で、国土交通省がタイムリーな施策を打ち出してきました。これを私ども市町村が使わないということは、ある意味我々



南湖公園



小峰城

の能力不足を示すことになると考えて、いち早く取り組んでみようと考えた次第です。

聞き手) 余談ですが、細川知事の時代の景観文化企画室長は、我々建設省の都市計画の先輩が出向していました。まさかそこまで繋がっているとは思いませんでした。

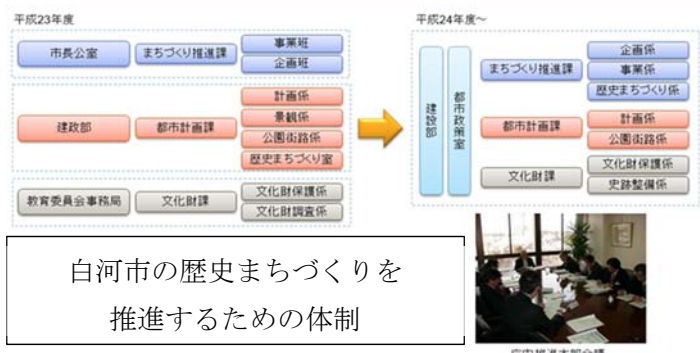
2. 市長部局と教育委員会の調整について

聞き手) 都市政策室長に文化財の学芸員を充てたと聞きました。お考えをお聞かせください。

市長) 中心市街地活性化については、当初、計画認定に向けた企画・調整等が主だったことから、市長公室に組織を置いて、認定をいただいた後は建設部の所管としました。歴まちの計画については、都市計画課に室を作ってその時の室長は学芸員を充てました。歴史と文化ということになると、文化財の活用は欠かせないだろうと考えましたが、文化財を所管する教育委員会とすればそれらを守るという基本的なスタンスが当然のことでしょう。しかし守るだけではまちづくりには大きな問題があるのではないかと、守りつつ活用するにはどうしたらいいのかを模索していたところ、たまたま萩市の野村市長にご招待を受けて同市に伺う機会を得ました。戊辰戦争のときに萩が白河を占拠しましたが、おそらくその時に農民兵士が、白河盆踊りを覚えて帰り、萩に戻ってから白河で亡くなった人の霊を弔っていると聞いて、野村さんが市長に就任した翌年（平成20年に）、本場の白河踊りと萩で受け継がれた白河踊りとで共演しようということになり、明倫小学校の校庭で踊りを披露しました。その後、野村市長といろいろな話をする中で、萩市では文化財と市長部局を一緒にしているという話を聞いて、それがヒントになって、白河市でも文化財課を市長部局の建設部に入れ、さらに都市政策室をつくり

ました。同室長には、文化財の専門家も充てましたが、いまの室長も文化財の専門家です。守るべきものは守ります、しかし活用できるものは活用します、まちづくりの中で文化財行政、文化行政を進めるのが、市長の意向が一番伝わりやすいと考えました。まちづくり推進課と都市計画課、文化財課が協議し、連携しあって各種施策を進めており、うまく展開しています。

白河市では、建設部内に「都市政策室」を新設(平成24年度)し、まちづくり(歴史まちづくり・景観・中心市街地活性化)、都市計画、文化財各部門の連携による、足元の資源を活かしたまちづくりを推進するための体制を整えている。
さらに、「白河市歴史と伝統を活かしたまちづくり庁内推進本部」を組織し、円滑かつ効率的に事業を推進できるような体制を整えている。



聞き手) 野村市長は歴まち法を作るときにご参加いただきました。歴史的風致維持向上地区計画は、野村市長に言われて法律の中に盛り込みましたが、萩市では使われず白河市で用いられたのも、不思議な縁を感じます。

市長) 野村市長からまちづくりのいろいろな哲学を聞いて参考になりました。

3. 震災直後の蔵の保存活動について

聞き手) 白河市は歴まちの認定を受けた直後に東日本大震災の被害を受けましたが、震災直後から市長自らが蔵の保存の説得に回ったと伺いましたが、そのお考えをお聞かせください。

市長) 23年2月に歴まち計画の認定をいただいて、一か月たないうちに大震災に襲われました。小峰城の石垣が崩落しましたし、市内でも土蔵が相当壊れました。13名の方が犠牲になるなど被害は甚大でしたから、市全体が重い雰囲気になっていました。そんな中であって、土蔵の価値云々は二の次で、無用の長物のように感じてしまうと、もうこの際取り壊してしまおうと考えるわけで、このままどんどん土蔵が取り壊されてしまうと、危機感を覚えました。そこで歴まちの担当者と一緒に軒一軒回りました。歴史的建造物である蔵がもし壊されて、駐車場などになったら、白河の歴史的風致、景観が損なわれてしまいます。蔵は個人の持ち物ですから、壊されても仕方がないのかもしれない。しかし、町並み全体が歴史的な資源、いわば公共物であるから歯抜けにしては価値を損ねると言って、

もちろん歴まち計画の認定を受けていたこともあって、改修費の一部を助成いたしますということで、歴史的建造物の保全をお願いしました。多くの所有者の方々が、市長がそこまで言うのならそれもそうだと賛同していただきまして、被害を受けた蔵の相当部分を残すことができました。町並みの保存は、道路とか下水道を修復するのに比べれば地味だけれど、あとから気づいたのでは遅いんです。今のタイミングしかないと一緒に軒一軒回って、説明して話をしてきたということです。その時に参考になったのは、阪神淡路大震災で被災した神戸市の方に聞いた話です。震災があると当然家をはじめとして、重要な施設を優先して修復し、地域の鳥居が壊れたことなどの対応は後回しになる。しかし後から考えてみると、それが非常な損失だった、というのです。ですから、東日本大震災直後の混乱の中であって、蔵は町並みの有力な構成要素であるので、何のために歴まち計画を用いてまちづくりをするのかと考え、速やかに動くべきだと判断しました。震災直後だからもちろんたくさん課題はありましたが、町並みの保存に時間を割いて動いたということが、今となって考えても当時の対応は正しかったのだと感じています。3月に被災しましたが、4月にはもう動き出していたと思います。市民の皆様は打ちひしがれていました。蔵などの歴史的建造物は、なくても生活に困るものではないと思う方もいたかもしれませんが、町並みを守るということはそういうことじゃないんです。

聞き手) 震が関でも沿岸部の話しか話題になりませんでした。白河市の話は文化庁の記念物課と国交省の公園緑地・景観課しか話題にしていなかったわけですか。



修復前



修復後

市長) 市長就任当時、小峰城は国の史跡指定を受けていませんでした。都市公園事業でやれば整備はできるし、文化財になれば窮屈だという意見もありましたが、市長になってすぐに文化財指定の準備の指示を出し、平成 22 年の 8 月に史跡指定を受けることができました。それが幸いして文化財予算で震災の復興に取り組むことができます。小峰城は白河を代表する歴史的資源ですから、小峰城はまず守らなければなりません。石垣も孕んで（ふくらんで）いるので、都市公園事業での復旧ではセメントを流し込むような工法になってしまいます。それでは国指定史跡の復旧にはなじまないと考え、ここは文化庁所管の事業として実施することとしました。



震災により崩落した石垣（本丸南面）



復旧後の小峰城

4. 市民の参加について

聞き手) 市民の参加は蔵の保存以外でどういうところで出てきましたか。

市長) 現在改修工事中の旧脇本陣は、旧奥州街道の中心にあり、戊辰戦争とゆかりのある歴史的な建造物ですが、これをどうやってまちづくりに生かすか、地元の町内会と懇談の機会を儲け、いろいろ話をしているところです。また、別の町内会とは景観協定についての話し合いをしています。私は、市民との市政懇談会など機会があるごとに、白河の歴史文化というものは足元にいろいろな資源があるのではないか、それを活かさないということは考えられないということを 10 年間言い続けてきました。市民の方々にもある程度浸透していると思っています。まちづくり会社



旧脇本陣柳屋旅館の蔵座敷

の株式会社白河と連携して賑わいを創出しようとしています。まちづくりに市民の皆さんが参画することが必要。そのためには、地域ごとに活動する団体をつくっていかなくてはならないと考えています。旧奥州街道沿いの町内の中には、このままでは地域コミュニティが疲弊してしまうという危機感を持っている町内会があります。自分の街に対する「危機バネ」が働くと動き出しますが、最初からこれをつくれと言ってしまえば長続きしません。危機感というか、このままではどうしようもないということに気が付かないとダメなんです。そういった危機感が、コミネスやマイタウンのように市内で活

動ができる場が整ってきたことに刺激を受けて、まちづくりに市民が参加する気運を醸成していくのだと思います。

聞き手) ずっと言い続けてようやく伝わってきたということですか。

市長) そうなんです。やっぱり何年も続けられないとなりませんね。小布施町長と会う機会がありましたが、先代の町長と今の町長と 30 年くらい言い続けてきて、やっと変わってきたと言っていました。最初は抵抗がありますよね、でもやりつづけるとそれが当たり前になってくる。やはり言い続けることです。まちづくりの苦しさは続けることですね。これは、あと 10 年 20 年かかると思います。政治的に取り組む課題なんです。

聞き手) 萩市長の話もそうですが、柔軟にいい事例を取り入れていきますね。

市長) 私の場合ほかの事例を聞いたり見たりするのは非常に有益でした。いいことをやっていると思ったら取り入れます。そこにこだわりはないです。小布施町や萩市は進んでいるのですから、それぞれ事情は異なるにせよ、あてはまるものは必ずあるわけです。それを取り入れればよいのです。

聞き手) ベストプラクティスマodelとして、よそでうまくいっている事例で取り入れられるものはほとんど取り入れていくことが重要ですね。そこと競争するわけではないですから。

聞き手) これからのまちづくりで、市民の団体を参加させていく方策は、どうお考えですか。

市長) それが難しいところだと思います。まちづくり会社の(株)楽市白河というのは平成 12 年からありますが、発足当時はあまり機能していなくて、平成 21 年に中活計画の認定を受けた時に役員が入れ替わりました。これから 10 年から 15 年頑張れる人をと考え、当時 50 代前半の人に白羽の矢を立てて、代表取締役になってもらったんです。そうすると社長を孤立させるなよと、商工会議所の専務だとか、青年会議所の若い人たちが彼を支えるようになりました。これで会社の動きが活発になり、定住人口促進のための共同住宅をつくったり、街なかのにぎわいを創出する施設「楽蔵」をオープンさせることができました。まちづくりはやっぱり人なんです。今、社会の真ん中で、活躍している人が活動の中心に入らないと、他人ごとになってしまう。失敗したら市が何とかしてくれるという気持ちではうまくいきません。楽市が活発になってからまちづくりは変わってきました。具体的に動き始めました。もちろん市として、銀行に支援を依頼するなどサポートはしました。まちづくりは 10 年単位で考える必要がありますので、これからの 10 年活躍できる人に求心力を作ってもら必要があります。みんな本業を持ちながらやっているわけですから、もしうまくいかなかったらというリスクを負うわけで、普通はしり込みしますよね。でもそこを乗り越えて今の人たちが集まっている。全国のまちづくり会社の中にはうまくいっていないところも多いのではないのでしょうか。設立したけれど当初の予定通りきちんと動いているかということ、必ずしもそうではない。白河市では今、まちづくり会社が元気ですから、あとは建築サポートセンターや各地域のまちづくり協議会など、景観を良くしようと考えた団体や人が増えてくるといいと思います。

5. 白河建築サポートセンター

聞き手) サポートセンターに話を伺ってきました。経済的に自立しているところには至っていないのですが、一定の行政からの発注、委託という下支えが必要ですが、もともと建築士会ですから守るのも

壊すのも彼らがやってきていたわけですが、その意識、プリンシプルが変わってきているような印象を受けました。まず建築士会の人の意識が変わってきて、それが相談を受けている市民に伝わっていくという効果がある。サポートセンターのような団体をつくっていくことは、かなり有効な政策なのではないかと感じましたが、いかがですか。

市長) そうだと思います。まちづくりをする団体はたくさんあります。建築士というのは具体的な建築を通して街の景観をつくるわけですから、まちづくりに大きな影響を持っています。公共性を持っているので、建築士の方々をまちづくりに組み入れていくことは有効だと思います。



NPO しらかわ建築サポートセンターによる
伝統的技術伝承事業研修会（現場見学）

歴まち計画の策定中に、歴史的な建築物の調査を建築サポートセンターに委託しましたが、歴まち計画の認定を契機に、建築士と協働することの大切さに気付き、それが歴まち支援法人の指定につながり、歴まち計画の実行の力になっています。せっかく団体があっても資金的に余裕がないとまちづくりに積極的に取り組めませんので、市が建築サポートセンターに業務委託をしている部分があります。建築サポートセンターもそういった事業を通して自分たちが思っていた白河よりもさらに深いものがあることを感じたはずです。

聞き手) 市長から設立のアドバイスをされたのですか。

市長) その当時に白河にゆかりのある日大の若井教授や早稲田大学の有賀教授といった、建築、都市計画を専門とする方が学生を連れてきて白河の街づくりの絵をかいたりしていたのですが、ちょうど同じ時期に集まってこられて、様々なアドバイスをいただきました。それが建築サポートセンターや楽市白河などにつながっていると思います。いい刺激を与えてもらいました。自分たちの役割は思っていた以上に大きくて、楽しいものがあるという感じを受けたのではないのでしょうか。

聞き手) たまたま集まったというよりは、それまでも来ていた人たちだったのを、それを市長がコンダクターとしてまとめ上げたのではないですか。今お伺いしていると、本当にオーケストラの指揮者の役割を強力に果たされている印象です。

市長) そうかもしれません。一見、個々の動きはバラバラですがまちづくりに対する動きや機運はあったんです。オーケストラの指揮のように、それを調和させていくという働きかけをしたことで、もともと膨らんでいたつぼみがいっぺんに花開いた、まとまって音が響きあってきたような感じですか。市長はオーケストラの指揮者で、いろんな団体があれば、それぞれのベクトルで動いている。それを総合的に何とか音色が合うようにしていくのが役割です。まちづくりも多分そういうものでしょう。

聞き手) 市長が指揮者であることはどこのまちでも同じですが、上手な指揮者と下手な指揮者があるのでしょうか。

市長) 不協和音はどこでも出るのです。不協和音が大きすぎると、まとまりかけたものもばらばらになる。不協和音は多少なりともあるけれど、聞いていて不愉快になるレベルにならないように気を付けるということでしょうか。

6. 大学の役割について

聞き手) 学校の役割はいかがでしょうか。

市長) もちろん役に立っています。大学の先生というのは全国のいろいろな事例を、うまくいかなかった例も含めて教えてくれます。我々が知りえないものの考え方とかを、教えていただきました。まちづくりのシンポジウムを開催し懇談した際など、何気ない言葉に触発されることがあります。行政マンとは持っている情報やとらえ方が違うので、大学との協働は有効だと思います。これからも意見交換をしていきたいと思います。

7. 観光と地域間連携について

聞き手) 地域の活力の拠点としての白河市、広域的な観光という視点での白河市をどう考えますか。

市長) 市町村の場合は、合併して大きくはなっていますが、自分の行政範囲で起承転結させるという傾向が強いです。連携というのは口では言うけれどなかなか難しい。おらがまちで完結させようとしがちで、みんな持ってきたいというのが人情ですが、それでは立ち行かないのです。これからの時代は、連携が非常に大事なキーワードです。まちづくりでもそうだし、城下町白河のまちづくりと、純粋な農村地帯の村とでは全く魅力が違いますが、これを連携させることによって回遊させる、あるいは観光につながる、そういう時代になってきました。特に観光では、前の経産局長さんが、観光は東北6県でも狭すぎると対象を広く捉えて、市町村単位では小さすぎるとおっしゃっていました。白河広域市町村圏で9市町村あり、その単位でまず考えますと、地域の中では歴史と文化は白河に任せて、こちらの町は農地だとかいう風に役割分担できれば理想です。そこを乗り越えていけるかどうか、小さい地方都市が生きのびていくには、広域で組んでいくということが必要だと思います。観光は9市町村でキャンペーンを行っていて、県境を越えて、那須町長とも那須塩原市長とも会合を持ち連携しようとしています。白河と那須は非常に近い、FIT構想(*)で茨城県北部、栃木県北部との連携です。そして観光であれば会津を加えるのも一つの案です。県境等はあまり意味がありません。



南湖公園湖畔店舗群のイメージ

8. 他の都市へのアドバイス

聞き手) 他の都市へのアドバイスをいただけませんか。

市長) 桑折町長と磐梯町長と話をしたが、サミットは良かった、サミットを通じて自信が持てたと言っていました。わが村に、わが町にこういう魅力があるのだということを、政策として訴えかけていけることがわかった、それはすなわち誇りだということです。それは当たり前のことなので、足元にはこういうものがあるとはいつも言っているのですが、それを政策として現実化させることができなかった、あるいはツールがなかった。だから、歴まち計画の認定でまちづくりに取り組めることを喜んで

います。福島県の中に歴まち計画の認定を取って、まちづくりを進められる自治体はいくつもあると思います。冒頭に言いましたが、「足元にある資源を活かしながら、つくりあげていく。それを見ている市民の方々も自信を持つことができる」ということがすなわち地方創生に繋がっていくのだと思います。

聞き手) 今日伺った話の中では、建築士会をパートナーとして参加させると、結果として市民の意識が変わるところを、白河モデルとして他の都市にも紹介したいと思います。

市長) そういう具体の例を出すと、なるほどと思うんです。抽象論で言ってもわかりにくいので、とりかかりはどこからというほうがよい。またすべて条件を整えようとするのは無理があると思います。あるものからやっていく。足りないものは後でカバーしていけばいいんです。

会津若松の歴史と白河の歴史は競合はしない。やり方は当然違う。違っていいんです。会津若松はなるほどこういう発信力があるということは見習わないといけないと思っています。

市長) 中心市街地活性化に取り組んでいる時、ある方から街は外に広がりながら変わっていくものだから、新白河駅周辺の開発に重点を置くべきではないか、より効率的ではないか、中心部に投資するのは無駄ではないかと言われたことがあります。私は違いますと答えました。少なくとも400年かけて作ってきたこの街並みの中心は小峰城であり白河駅であり、旧奥州街道のこの限界であり、ここが衰退したら何のためのまちづくりになるのか、との思いがありました。経済的に発展したのは新白河かもしれないが、今の中心市街地が白河の顔なんです。新白河駅は商業の街の顔にしていけばいいのではないかと言った覚えがあります。最初は反発もありましたが、中活と歴まち事業を通してまちづくりに取り組む大きな指針になりました。

聞き手) 都市計画のマスタープランは総合的だからわかりにくいところがあります。それに対し景観や歴史まちづくりは方向性がわかりやすい。景観法がむしろこれからのマスタープランになるのではと思っています。

市長) その通りだと思います。県職員時代、都市マスタープランに携わったことがあります。やはりわかりづらい。それに対し景観だとか歴史まちづくりはわかりやすい。いくら高邁な理念があっても、専門用語を使っても、市民に伝わらなくては意味がないと、職員に言っています。わかりやすく目標を明確にすることがいいと思います。

聞き手) どうもありがとうございました。

聞き手：

鈴木武彦 国土交通省東北地方整備局

建政部都市調整官

舟引敏明 宮城大学事業構想学部教授

佐々木秀之 宮城大学事業構想学部准教授

(*) FIT 構想は、首都東京に近接し、新しい時代にふさわしい、人々をひきつけてやまない地域づくりに向けたポテンシャルを豊富に有する福島(F)・茨城(I)・栃木(T)の3県の県際地域(那須岳・八溝山を中心とする地域)が、これまで培ってきた交流・連携をもとに広域交流圏としてのさらなる発展を目指すもの